

金相寺 寺報

遇

～ ぐ う ～

encounter magazine "Guu"



金相寺本堂と境内

9月

September 2012

No. 3

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



● 赤山明神での

女性との出会い

磯長の夢告からおよそ七年、親鸞聖人二十六歳の頃です。全身全霊修行に打ち込んで、いまだ真つ暗な心の解決が見えてきません。悩まれた聖人は、京都の慈鎮和尚を尋ねられました。指南を受け、比叡山への帰り、延暦寺の別院たる赤山明神（赤山禅院）の前を通りかかられた時に、美しい女性に声をかけられました。

「私には深い悩みがございます。どうか山にお連れください」と願う女性に対し、親鸞聖人は、「それは無理です。あなたもご存じのとおり、このお山は伝教大師が開かれてより、女人禁制の山です。とても、お連れすることはできません」と断ります。

ところが、女性の言うことに、聖人は大いに驚かされました。「伝教大師ほどの方が『一切衆生悉有仏性』

の経文をご存じなかつたのでしょうか。すべての者に仏性があると、お釈迦さまはおっしゃっているではありませんか。それなのに、このお山の伝教は、なぜ女を差別するのでしようか。穢れた女が入ると山が穢れると言われるならば、すでに鳥や獣のメスでこの山は穢れています。鳥や獣のメスがいる山へ、なぜ人間のメスだけが、入ってはならないのでしょうか。お願いでございます。どうか、いつの日か、すべての人の救われる真実の仏教を明らかにしてくださいませ」

こう言い残して去った女性のこと、深く聖人の心に焼きついたのであります。



赤山禅院



【三世】

小院金相寺の片隅に、方丈（四畳半）よりもやや広い、愚生が自室として使用させてもらっている小部屋がある。もちろんエアコンなどないため、夏季は窓を開けっ放しにしている。

その窓から、早朝よりけたたましいミンミン蝉や油蝉の入り混じった啼き声が入り込み、部屋に充満し、我が耳根の奥深くまで遠慮会釈なく入ってきて、ただでさえ思考力の鈍い頭を、思考停止にしよう。蝉に感心させられるのは、あのよくな小さなからだから、廻りの音を打ち消してしまうほどの啼き声が出るのか、驚くばかりであるが、この蝉を詠んだ芭蕉翁の句に

頓て死ぬ

けしきは見えず

蝉の声

というのがあるが、この句をかりて、我々人間を詠み込んでみれば、

やがて死ぬ

けしきは見えず

唾み合い

とでもなろうか。

我々人間の寿命は、永くても百年足らずで、何人もこの娑婆世界を去っていかなければならない。さすれば、日常吾人が一大事の如く争い唾み合っている問題は、どうでもよい事のように思えてきはしないだろうか。

ところで蝉は、七年ほど地中にいて、その後、夏の時期に地上に出てきて、僅か十日足らずで死んでいくということであるが、中国の曇鸞大師が著された『往生論註』の本巻末に

蟪蛄春秋を識らず、

伊虫あに朱陽の節を知らんや

との御文がある。

「蟪蛄」とは蝉のことであり、「朱陽」は夏を表す。蝉という虫は、夏の時節に地上に生まれ出て、夏の間に死んでいくわけであるから、春秋の季節を知ることはない。

しかし、僅かの間であっても、夏に生きる虫なのだから、夏という時節は知っているであろうと思われるが、曇鸞大師のお言葉を通せば、「春秋を知らざるものが、どうして夏に生まれ生きるからといって、夏を知ることができようか、知ることとはできないのだ」ということである。



曇鸞大師像

この御文を先程の芭蕉翁の句の如く、我々人間にあてて味わってみれば、

今の人、前世後世を知らず、

此の人あに現世を知らんや

となるるか。

前世だ後世だなどというのと、それこそ空言戯言としか捉えず、耳を傾けようとしてもしない多くの現代人は、五体で感得できるこの娑婆世界だけが真実存在する世界と我尺（自分の思いで勝手につくり出した尺度）をもつて計らい、現世を分かり切った如くに見えるが、現世にとらわれ、現世だけを見て生きている現代人は、本当のところ現世の何たるかを全くわかっていないのではないだろうか。全く分かっていないのに、分かったつもりで行動する結果として、広くは国と国との、近くは家庭内の、また自分自身の内面に於ける葛藤といった争いが尽きず、繰り返されてい

ると思えてならない。

親鸞聖人が、『皇太子聖徳奉賛』という、聖徳太子の広大なるお徳を讃えられた御和讃の中に

和国の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しがたし

と讃嘆されており、「和国の教主」とは聖徳太子を「日本のお釈迦様」と崇められておられたのであるが、その聖徳太子は、『上宮聖徳法王帝説』の中に、常のお言葉として、

世間虚仮唯仏是真

（世間は虚仮にして、唯仏のみ

これ真なり）

と仰せられたとある。



聖徳太子お掛け軸
（金相寺本堂）

娑婆世間は虚仮（虚しい仮の、嘘偽り）の世界と、日本史上最大な人格である聖徳太子は見ておられたということであろう。

現世のみに眼を向け、我執に生きる我々が、無常の世界を常住と、苦と感ずべき現実を楽と、無我なる身を有我と、穢なる世界を浄と思い誤ってつくり出される世界を「虚仮」と仰せられたものと思われる。

我々が三世を通した、真実なる「いのち」に覚めたとき、今まで肉眼で、肉耳で見聞きする世界こそ、真に実在する確かな世界として執着し、勝った負けた、損だ得だ、好きだ嫌いだといったことに心動かされ、また、地位だ名誉だ財だといったことのみに進んでいる日々が、全く虚仮不実の世界であったと気付かされて、虚仮なる世の流れに流されることなど、確かな人生を生きていけるのではないだろうか。

成田 宣信（金相寺住職）

おんどうぼう 御同朋の声

今回『御同朋の声』にご寄稿いただきましたのは、金相寺の仏教青年会「無意味の会」にご参加いただいている戸嶋穂高さんです。

「無意味の会」とは、同世代の若者が集まり、その時々それぞれが感じていること、関心を持っていることなどについて、自由に意見や思いを語り合う場として、毎月一回のペースで開催しています。

戸嶋さんは、金相寺のご門徒（檀家）さんではありませんし、そもそも真宗門徒ではありませんが、この青年会を縁として、現在では子ども会など様々な活動にも携わっていただいております。

【青年会を縁として】

戸嶋 穂高氏（青年会参加者）

およそ七五〇年前、鎌倉時代は仏教では「末法」と呼ばれていた。五濁にまみれ、煩惱の支配する時代。法然上人が提唱し、親鸞上人が受け継いだ浄土の教えはそんな中で必死に生きる民衆を救う、一筋の光だった。

そして時代は過ぎ、現代はどうだろうか？ 私は現代もまた五濁にあふれた末法の世であるように感じる。確かに生活レベルも上がり、飢える事は少なくなっている。しかし、世界を見れば紛争は絶えず、日本においても人とのつながりを感じられなくなり、もしくは辛うじて生きては行けるものの、貧困から抜け出す事の難しい世界。それが現代であるように思える。

本物と偽物が入り交じっている世界で、ある人は詐欺に遭い、ある人は新興宗教に騙され、信じる事が難しい時代が現代ではないだろうか。

仏教青年会の「無意味の会」が一年を迎えた。僧職の方のための難しい会ではなく、一般の俗世の間達人が煩惱にまみれながら答えを探す会だ。



青年会「無意味の会」の様子

あの東日本大震災が起き、それに付随する防災意識が高まり、計画停電が始まり、原発や放射能がという新しい脅威に怯え、総理大臣が変わった。

仏教青年会ではこの一年、様々な角度から「生と死」を繰り返し語り合ってきた。それぞれの回のテーマ

は放射能であり、原発であり、震災ではあったが、その奥には「いかに生き、いかに死ぬか」という一点に集約されていたように感じる。

副住職の仲間の僧侶の方も、僕のように一般人として仏教青年会に参加していた人たちも、共に悩み、答えの出ない問いに対して必死で向かい合ってきた。

そんな中、副住職の僧侶仲間との活動に参加させて頂いた事により、被災地でのボランティアに参加する縁も得て、今まさに苦しみの中でもがいている方々との縁も得た。



真宗大谷派のボランティア活動で戸嶋さんと共に宮城県牡鹿浜へ

被災地での悲劇は決して他人事ではない。そして悲劇は震災だけでもない。



ボランティア先の様子（四月）
※ 戸嶋さん撮影

この生きにくい世の中で、いかに生きるか。そして、いかに死ぬか。誰もが人生において必要とされる大切な命題が、大っぴらに語りづらいこの世の中で、仏教青年会という場、そしてそれを作り上げた金相寺という場が生きる中で重要な羅針盤になってくるように感じる。

崖っぷちに立って、目隠しをされ

て「足に命綱がついているから、思い切って飛び降りなさい」と言われても、少なくとも僕は飛ぶ事はできない。

真宗の念仏とは目隠しを外し、足下の命綱を確認する事が、まさに念仏なのではないだろうか。

仏教青年会は強く教えを強いる場ではないが、念仏に縁を得た者として、仏教青年会で縁を得た者として、できる事をできるように、できるだけに、生きていきたいと思



※ ご寄稿のお願い

『御同朋の声』では、皆さんの声、ご寄稿をお待ちしております。日頃の皆さんの思いなど、ご自由にご寄稿下さい。詳しくは副住職までお尋ね下さい。よろしくお願ひ致します！

副住職の

日々の出遇い



●金ピカキッズ・夏のことも会

去る八月二日、金相寺子ども会の「金ピカキッズ」夏の子ども会を開催しました。ちょうど一年前、わずか十五名で始まったこの会でしたが、今回は六十名を超える多くの方々にご参加いただきました。

まずは、みなでお勤めです。今回は子ども達の主体性を大切にしたいという思いから、お勤めも参加者の子ども達に勤めてもらいました。

お勤めの後は、『いのちのまつり』という絵本をみんなで読みました。想像できないほどの多くのご先祖様のいのちがつながって、今この私が存在するんですね。不思議そうな顔をしながら絵本を見ている子ども達の顔がとても印象的でした。

その後は、みんなで宝探しやゲームをしてみんなで楽しく遊びました。身体を思いっきり動かした後は、みなでお待ちかねのお弁当タイム

ム！更にお弁当の後はお楽しみのかき氷。たくさんあった氷もあっという間になくなってしまいました。

想像以上に多くのご参加をいただき、私も妻も不安いっぱいでしたが、終わってみれば、多くの子ども達の笑顔に出会うことができ、素晴らしい時間を過ごすことができました♪

次回の子ども会は、青年会と合同開催で、十一月十日に親鸞聖人のご法事「報恩講^{ほうおんこう}」を勤めます。また皆さんと会えることを楽しみにしています。皆さんのご参加、心よりお待ちしております！



お勤めの様子

今後の予定

法要

- ・秋彼岸会 九月二十二日
- ・報恩講 十一月十一日

勉強会など

- ・正信偈学習会

十月十三日午後二時～

※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の第一土曜日に開催予定。

- ・青年会・子ども会報恩講

十一月十日

※詳細はホームページをご覧ください。

- ・仏教青年会（無意味の会）

毎月一回（次回九月二十七日）

※毎月の開催日等、詳細はホームページをご確認いただくか電話・メールにてお問合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

この寺報をはじめとして、新たな場をひらくなどの試みをはじめてちょうど一年になります。今、一年を経て、はじめることの大変さ以上に、継続していくことの難しさを思い知らされています。

様々な願いを持つてはじめてきたことではありませんが、いつの間にか目先のことにとらわれて、うまくこなすことだけに思いがいつてしまっではないか：：。そんな自らの在り方、向き合い方を一年経った今問われていのように思います。

しかしその一方で、もうひとつ気付かされることは、私一人で場を作ってきたのではないということです。私が！と思つて力んでいたけれど、実は逆で、皆さんによつて様々な場が与えられていたのだと。その場に参加して下さる方、ご協力して下さる方々みなで場を開いているのですね。傲慢な自身の在り方と、そんな私に大切な場が与えられているというこのありがたさを、この寺報を編集させてもらいながら気付かせていただきました。

合掌

『遇くぐう』第三号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺
副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL&FAX 042-778-2879

e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>

発行日 二〇一一年（仏歴二五五五年）年九月一日